

〈研究ノート〉

相対的剥奪論 再訪 (八)*

—J. Davies の J-曲線理論へのダイグレッション—

高 坂 健 次**

はじめに

前稿まで、「相対的剥奪」理論のいわば形成史を著作の発表年代順にやや詳しく辿ってきた。もっとも、相対的剥奪論の「前史」とも言うべきトックヴィルやデュルケムの理論などについては、本格的に取り上げてきたわけではない。あくまで「相対的剥奪」概念を明示的に導入したスタウファーたちの『アメリカ軍兵士』を起点として、関連諸論文の発表を取上げてきたに過ぎない。論者で言えば、スタウファーたちに加えて、マートン、ラザーズフェルド、デーヴィス、ランシマンらが主な論者であった。そしてあえて言えば、彼らは「社会学者」だった。

本稿で取り上げるのはデーヴィーズである。二つの点で、これまでの「研究ノート」の路線からは外れる。一つには、彼が純粹の「社会学者」ではなかった点にある。むしろ、本稿で取り上げる論文が ASA (『アメリカ社会学雑誌』) というアメリカ社会学会の本流の学会誌に掲載されたという点に鑑みれば、レッキとした(政治)社会学者と言ってもよい。しかし彼はオレゴン大学の政治学の名誉教授になったところから見れば、社会学者であると同時に、それ以上に政治学者として認められていたと思える。もう一点は、彼の論文—それは「J-曲線仮説」で有名になった—には、「相対的剥奪」概念が登場しないという点にある。

では、どうして「相対的剥奪」概念に言及しなかったデーヴィーズ論文を本「研究ノート」、すなわち「相対的剥奪論 再訪」シリーズで取り上

げるのか。一つには、「相対的剥奪」概念の定義にもよるだろうが、彼の理論は、以下に見るように、そうとしか言えない理論的要素を含んでいる。さらに、後のガーという政治学者ないし政治社会学者は「相対的剥奪」概念をふんだんに用いて『人々はなぜ反逆するか』という本を著したが (Gurr, 1970)、ガーはその理論の出発点にデーヴィーズの論文を「革命理論」の嚆矢の一つとして挙げているからである。

以上のように、いくぶん屈折した経緯と背景がありつつも、ここでデーヴィーズ理論を取り上げることから、本稿の副題には「ダイグレッション (= 補論、余論、脱線)」の言葉を添えた次第である。

1 デーヴィーズの J-曲線理論

彼の理論の特徴は、その明快さにあるのではないかと思わせるくらいに理解しやすい。それが故に、このたった一本の論文が斯界に於いて大きな影響力を持ちえた一半の原因ではないか。彼の理論は図 1 に要約されている。

彼の問題関心は、どうしてある時ある社会で「革命」(現象)が起るのか、にある。図 1 が示しているところは、いくぶん私なりの表現も添えながら解説するならばこうである。ある社会においては、(通例、経済発展によって)要求充足が客観的に拡大する。それにつれて人々の期待も大きくなる。ある時点までは現実の要求充足が期待上の要求充足に見合うかたちでついてくる。一般に、現実の期待を少し下回ることが多いけれども

*キーワード：相対的剥奪、革命、J-曲線理論、ランシマン

**関西学院大学名誉教授

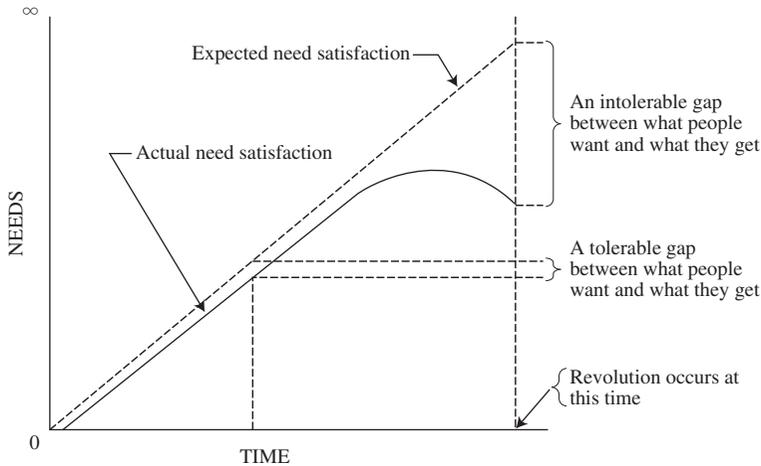


図1 デーヴィーズのJ-曲線理論 (Davies, 1962: 6より再録)

(破線と実線の間のギャップ)、それは許容範囲内に収まっている。けれども、どの時点かで現実 は期待を大きく下回るようなかたちで「失速」し、これまでの線形的な上昇はピークを迎え、下降する。にもかかわらず、期待だけは今までどおり線形的に上昇を続ける。現実が下降した時点でみると、期待と現実のギャップは著しく大きくなり、「耐え難い」ばかりになる。革命が起こるのは、この時である。

彼は、この理論図式を ‘the J-curve pattern’ とさりげなく呼んだり。どこが「J」か。「J」パターンは、現実(の要求充足)が失速して下降するところが折れ曲がっていて、この曲線を含めた全体が「J」の形をしている、というのだ。だから、「J」の形を正位置と見なせば「J」の頭を座標軸の原点のところに固定しておいて、(現実や期待の当初の上昇直線を仮に45度線と見なせば)右に135度回転させたところの位置に見られる、と言えばよい。ちなみに、デーヴィーズは、「J」の形については何ら言及していない。

彼自身の言葉を引用すれば、「革命は、長期に亘る客観的な経済的社会的発展の後に短期の鋭い逆転があったとき最も起こりやすい」(ibid, p.6)。

デーヴィーズは、この論文ではさしあたり3つの「革命」事例を取り上げて、この理論図式があてはまることを示そうとしている。3つとは、「1842年のドールの叛乱」、「1917年のロシア革命」と「1952年のエジプト革命」である。彼はそれぞれの事例について、先の図と同様の座標でもって「現実」の要求充足線を、エピソードを織り交ぜて画いている。詳細は読者に直接見てもらうしかないが、それらの「J」は当然のことながら理論図式ほど滑らかに「J」の形を象っているわけではない。微妙に「山あり谷あり」なのである。

ロシア革命の例で言えば、1861年に農奴の解放があった以後のしばらくは滑らかな右上がりであるが、1881年のアレクサンダーII世の暗殺によって「右上がり」傾向は少し頓挫する。ふたたび順調な「右上がり」になるのは、1883年に亡命マルクス主義政党が立党され密かにロシアと接触をもったときである。

このあと、1904年に日本との戦争が1904年に始まり少しばかりの「へこみ」ができる。そのあと「右上がり」が回復するかと思いきや1月22日の深刻な抑圧期で急激な「右下がり」を経験、その後経済は回復するものの1914年にドイツと

1) 「J-曲線」はいろいろの分野で異なった文脈で使われている表現である。デーヴィーズ自身は、G. オルポートの使用例について脚注で言及している。

の戦争が勃発して、民間ならびに軍隊の困苦期を迎え、ついには「二月革命」そして「(第二次)ロシア革命」を迎えることとなったのである。

ちなみに、デーヴィーズの掲げている図はここで終わっている。日露戦争中の 1905 年に起きたいわゆる「第一次ロシア革命」についての言及はない。「J」はここでは、(2 度に亘る小さな「J」を内包しながらも)半世紀余りにも及ぶ長い「J」である。

デーヴィーズは少なくともこの論文が書かれた時期は、革命の諸エピソードの解析に夢中であったようで、このさほど長くもない論文のなかで 3 つ以外の多くの革命にも言及しつつ、「絶対窮乏は必ずしも革命につながる」ことや「革命が起ころうで起ころなかった」場合について述べている。しかし、最終的には、時代の支配的モードが人々の心の中で「充足からフラストレーションへ」移行することについて理解を増すことで革命がいつどこで起こるかの予測もできるようになるだろうと考えていたようである。

2 相対的剥奪論としてのデーヴィーズ理論とその特長

2.1 冒頭にも断ったように、デーヴィーズは自分の理論ないし理論図式について決してそれが「相対的剥奪」論と関連していることについては明言しなかった。スタウファーたちの仕事(*The American Soldier*)について彼が知らなかったとも思えないが、この論文に関するかぎり引用も参照もしていない。しかし、ガーの指摘や扱い(ガーはスタウファーたちの仕事に言及している)を待つまでもなく、デーヴィーズ理論を相対的剥奪論の一変形とみなすことはむしろ自然なことのよう思える。本節においては、デーヴィーズ理論を相対的剥奪論のなかに位置づけ、相対的剥奪論からみた特徴を明らかにしておきたい。前稿で取り上げたランシマンの定義(Runciman 1961, 1966; 高坂 2012)は今でもよく参照される定義であるので、煩瑣と重複をいとわず再掲しておく。

或る人間が以下の条件を満たしているとき、そ

の人間は「相対的に剥奪されている」と言えるだろう、と。その条件とは、3 つある(Runciman 1961, p.316)。

- (i) 彼は X を持っていない;
- (ii) 彼は他人(単数であることも、複数であることもあるし、その「他人」のなかに過去もしくは想像される将来時点での自分自身を含むこともある)が X を持っているときのみなしている(実際に持っているかどうかとは独立である);
- (iii) 彼は X が欲しい(彼が実際に X を持つことが可能か *feasible* どうかとは独立に)。なお、「Y 無しで済ませる」も、むろん意味がある場合には、「X をもつこと」の代替になりうる。

後の主著(Runciman 1966)におけるランシマンの定義では、これらに第 iv 条件が付加されており、定義が修正されている。因みに、第 iv 条件とは、X を持つことが可能である(*feasible*)。

たとえば、ランシマンのこの定義からみて、デーヴィーズ理論はどう映るだろうか。デーヴィーズは、徹頭徹尾「国民」といったマクロな集合概念を念頭においていた。ところどころ、客観的に絶対窮乏している人々とゆとりのある人々との「革命」に対する対応や態度について比較的述べている箇所(*ibid.*, p.6)はあるにはあるが、基本的には集計された概念としての「国民 *people*」が議論の中心であった。したがって、「個人主義的転回」(高坂による命名)を果たしたランシマンの定義を直接的にあてはめることはできない。しかし、仮に集合的行為者を行為者 A とみなして、ランシマン定義によって、デーヴィーズ理論がどのように説明できるかどうか思考実験してみることが可能である。

ランシマンは第 ii 条件において、比較の対象は過去もしくは未来の「自己」を含むと言っているので、デーヴィーズの想定した状況はこれにあてはまる、と見なすことができる。デーヴィーズが言う要求充足の「期待」は自分が当然充足されて良いしそのことが本来的には可能(第 iv 条件)

である種類のものである。「期待」という言葉がすでに示しているように、A は当然、要求の対象である X が欲しいのである（第 iii 条件）。ところが、何らかの事情で、「現実」の要求充足は「失速」して「期待」に追いつくことができない。すなわち、「現実」は X を持っていないか、少なくとも「期待」ほどには持っていないのである（第 i 条件）。

こうして見てくると、デーヴィーズの理論はランシマンの4条件を十分満足していると私には思える。厳密に言って、両者に違いがあるとすれば、行為者が個人であるか集合的行為者であるかの違いがあるだけである。デーヴィーズの関心がそこになかっただけで、デーヴィーズ理論は、個人（の革命的）行動についても言えるだろう。すなわち、個人が長く期待してきた要求充足が突如断念させられたとき、そのギャップに耐えかねて（「革命」的）行動を起こす、というふうには。ランシマン定義を「個人主義的転回」と特徴づけるとすると、デーヴィーズの相対的剥奪論はさしづめ「集合主義的転回」と言えるかもしれない。けれども、今しがた述べたように個人レベルに類推しても十分に通用する議論だとするならば、両つの「転回」の違いを殊更に強調するには及ばないだろう。むしろ、相対的剥奪論の立場からみて、強調すべきは次の点にあるように思う。次にその点について述べよう。

2.2 先ほど、デーヴィーズの革命理論の核心部分を紹介したさいに、「長期の」発展と「短期の」逆転という表現があったことを想起されたい。ロシア革命の場合は半世紀以上に及ぶ「前」があった。「エジプト革命」で約30年、「ドールの叛乱」でも約半世紀が見込まれている。つまり「長期にわたる prolonged」経済的社会的発展がそこにはあったのである。

それに比べて、「逆転」は相対的に短期間に起こっている（a short period of sharp reversal）。ちなみに「短期」の期間は、彼によれば1917年ロシア革命の場合は13年、エジプト革命の場合は数年、ドールの叛乱の場合もやはり数年である。つまり「短期」と言っても多少の幅があることに

注意しておきたい。

デーヴィーズは議論の導入部において、マルクスは革命をもたらす要因として「事態の悪化」を、トックヴィルは「事態の改善」をそれぞれ強調したことを対比的に整理している。「事態の悪化」が革命をもたらすという考え方と、「事態の改善」が革命をもたらすという考え方は一見すると矛盾する。しかし、デーヴィーズは矛盾するものではない、と考えた。すなわち、「2つ [=2人] のアイディアは、もし適切な時間の流れ time sequence の中において並置されるならば、ともに説明的かつおそらくは予測的価値をもつように思われる」と。

デーヴィーズがマルクスとトックヴィルを例にあげて言いたかったことは、結局のところ長期に亘る発展と短期の逆転（落ち込み）が革命をもたらすと考えれば別に矛盾したことなく、それらを「時間の流れ」の中で位置づけることによって解決されるという点にあった。別言すれば、革命には事態の「改善」がまずあって、その後「悪化」があるときに起こるのだと言いたかったのである。

この命題の経験的真偽や検証はともかくとして、相対的剥奪論からみたばあい、デーヴィーズの提案の特長は、この時間の流れないしはプロセスへの着目にあると思われる。これは彼自身が意識したかどうかは別として、相対的剥奪論史における彼の独自の貢献と言ってもさしつかえない。そのことを確認するために、今一度スタウファータちの古典に立ち返ってみよう。

2.3 スタウファータちの『アメリカ軍兵士』は、すでに述べてきたように「相対的剥奪」という概念をはじめて意識的に用いた嚆矢の研究であった。しかし、その概念の厳密な定義はなかった。定義のないままに、さまざまな文脈とデータにおいて、それは説明概念として用いられた。その代表的なエピソードが兵士の客観的な「昇進率」と部隊別の兵士の抱いていた昇進制度に対する評価（→「満足」か「不満」か）の「一見パラドクシカルに見える」関係であった（高坂、2009）。その関係とは枝葉を切り落として言えば、たとえ

ば、昇進率の高い航空隊の方が憲兵隊より不満が高いという傾向が見られたのである。

これは、調査時点（＝入隊後2、3年）での兵士の態度について部隊間の比較を行った結果の発見である。兵士の態度の「時間的変化」が問題にされているわけではない。航空隊にしても、以前は昇進率が低かったのが最近は高くなってきた、という類の状況（が万一仮にあったとしても、それ）が問題にされていたわけではなかったのである。あくまで一時点での集団間比較による発見である。

スタウファーたちの研究は、相対的剥奪論の理論史からみれば「(平均的にみた) 集団的特性」が問題にされていた。その意味では集合主義的であった。ランシマンの定義は概念を「個人主義的に転回」させたのであった。では、デーヴィーズは徹頭徹尾「国民」が問題にされていたから「集合主義的」であったので、その意味ではスタウファーたちに近かったのかというとそうではない。デーヴィーズとスタウファーたちとは、理論的スコープがまったく異なるのである。

スタウファーたちの研究は、いわばクロスセクショナルな分析であるのに対し、デーヴィーズのアプローチは、ロンジチューディナルな分析である。前者は横断的、後者は縦断的である。コトバの厳密さを問わなければ、前者は共時的、後者は通時的と言ってもよい。すなわち、相対的剥奪論には、たとえばランシマンの定義を共有するとしても、まったく異なるアプローチがありうるものがこれで明らかになった。デーヴィーズが「長期的」な「前」(＝右上がり)があり、その後「短期的」な「逆転の後続」(＝右下がり)がある、というのが彼の言葉で言えば *time sequence* であり、プロセスとしてのワンセットなのである。そのワンセットが「J」である。このような発想は、スタウファーたちにはまったくなかった。

むろん、デーヴィーズが「相対的剥奪」という言葉や概念に言及することなく J-曲線理論を展開したことからして、相対的剥奪論から通時的なアプローチを除外することもできないわけではな

い。しかし、私は「相対的剥奪論」の理論的スコープの拡がりをもむしろ大切にしておきたいと思う。そうした「理論の一般化」こそが科学の王道だと考えるので、デーヴィーズ理論をあえて相対的剥奪論に含めて考えておきたいと思う。私たちは分析対象の性質によって共時的な分析方法を採ったり、通時的な分析方法を採ったりと、使い分ければいいだけの話である。

3 相対的剥奪論史における時間要素

これまで、「相対的剥奪論 再訪」は公刊された研究の年代順に追ってきたわけで、今ようやく1962年までたどり着いたところでしかない。しかも、マルクス、トックヴィル、デュルケムといった言わば「先駆者」の仕事については、折々に必要に応じて言及したにすぎない。そうした限界の枠内ではあるが、あらためて相対的剥奪論における時間要素がどのように見られてきたかについて見ておく価値があるだろう。

前節でみたところによれば、スタウファーたちの研究は共時的なので「時間」要素はない。それに対してデーヴィーズの研究は通時的なので「時間」要素がある。では、ランシマンの定義はどうか。すでに確認したように、ランシマンの定義は、比較の対象は文字通りの「他者」には限られない。「過去の自分」であっても良いし、「未来の自分」であってもよかったのである。ここでは「時間」要素は必須とはされていないけれども、入っていても構わない。ランシマンにとっては(そして、むろん相対的剥奪論にとっては)、むしろ「比較」が大切な鍵だったのである。

スタウファーたちの「相対的剥奪」に関する発見を系統的に整理したマートン自身は、「比較」という観点から「準拠集団論」を展開し、その議論の中では「時間」要素に十分配慮していた(Merton, 1957)。マートンの作りだした有名な概念である「予期的社会化 *anticipatory socialization*」という言葉²⁾そのものが「時間」要素の存在を意識していたことを伺わせる。その概念は、自分の

2) 邦訳では「将来を見越した社会化」。因みに、中国語訳では「預期社会化」(羅伯特・K・默頓著、唐少傑・齊ノ

「将来を見越して」現在役割取得を行う（＝「社会化」）ということを含んでいるからだ。

このように準拠集団は時間軸上「未来」に向かうこともあれば、「過去」に向かうこともある。じじつ、マートンは「準拠集団」が「所属集団」とずれる可能性について種々論じた箇所において「……現在の地位だけでなく過去のいろいろな地位がその現在や未来の行動に影響を与えているという事実」について指摘している（同上、邦訳 p.268、「(四) 非所属に対する時間的展望＝前成員と非成員」第九章「準拠集団と社会構造の理論(つづき)」)。

かつて1970年代に日本でみられた「新中間論争」においては、「過去との比較」仮説（岸本重陳）とか「エスカレーター仮説」（尾上久雄）というのがあった。前者は「……高度成長は、自分の過去を規準にする限り、『著しく向上した、改善された』という感じを強め」という仮説であり（岸本、1978：120）、後者は「一人当りの国民所得の急速な上昇が持続的に実現すると、自分が上位の階層に移ったと意識する人々の数が、実際の上位移動の数よりも多い」とする仮説であった（尾上、1977：291）。

それらの仮説の厳密な意味は必ずしも明らかではないし、仮説の経験的妥当性も明確ではないが、そうした「比較」には陰に陽に「時間」要素が伴っている。

「相対的剥奪」概念から「比較」要素を抜き去ることはできない。しかし、「時間」要素は必ずしも必須というわけではない。そして「時間」要素が含まれるとしても、単純に「過去」や「未来」と言った形で含まれる場合もあれば、デーヴィーズの通時的分析のように更に限定的に使われる場合もあることに注意しておきたい。

おわりに

近年、「China Puzzle」と称して「経済的発展と相対的剥奪のパラドックス」が問題にされることがある（Brockmann et al., 2009；Ishida et al., 2012）。このときのパラドックスは経済的発展が

見られた社会においては、天井知らずに線形的に幸福感が増するかというと、そうではないばかりか、むしろ不幸感（＝相対的剥奪感）が増大することがあるという経験的発見に関するものである。中国がその好例だという。したがって、その一見して矛盾に映る現象をどう理論的に解決し、説明するかが理論的課題とある。

経験的現象としては、「China puzzle」には明らかに「時間」の要素が入っている。経済的発展という言葉そのものが「時間」を内包しているし、幸福感（ないし不幸感）の増減も時間的増減を含意している。そしておそらくその「パズル」を解決するには、「相対的剥奪論」が不可欠であろう。

しかし、分析対象としての経験的現象が「時間」を含んでいるからといって分析枠組みに「時間」を必ず明示的なかたちで持ち込まないといけなしかどうかとなると、これは一応独立の問題であるように思われる。「時間」を導入した形で分析することも（当然のことながら）可能だし、「時間」を導入せずにいわば共時的に分析することも可能だろう。そして「時間」を導入するとしても、どのような形で導入するかはまちまちである。

いずれにせよ、デーヴィーズの「革命理論」は、私たちに「相対的剥奪論」における「時間」的要素の有無や意義について気づかせてくれた点で評価されなければならない。

本研究の一部は、科学研究費基盤研究（B）（課題番号：2333071 平成23～25年度 研究代表者：石田淳）の援助を受けてなされたものである。

参考文献

- Brockmann, Hilke, Jan Delhey, Christian Welzel, and Hao Yuan, 2009. "The China Puzzle: Falling Happiness in a Rising Economy." *Journal of Happiness Studies* 10: 387-405.
- Davies, J. C., 1962. 'Toward a Theory of Revolution,' *American Sociological Review*. 27(1): 5-19.
- Gurr, Tedd Robert, 1970. *Why Men Rebel?* Princeton: Princeton University Press.

- Ishida, Atsushi, Kenji Kosaka and Hiroshi Hamada, 2012. "A Paradox of Economic Growth and Relative Deprivation" (mimeographed ; under review)
- 岸本重陳、1978. 『「中流」の幻想』講談社。(引用は1985年の講談社文庫版より)
- 高坂健次、2009「相対的剥奪論 再訪(一)」『関西学院大学社会学部紀要』108号：121-132.
- 高坂健次、2012. 「相対的剥奪論 再訪(七)」『関西学院大学社会学部紀要』114号：245-256.
- Merton, Robert K., 1957. *Social Theory and Social Structure*, Revised and Enlarged Edition. NY : The Free Press. マートン、(森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳)、1961、『社会理論と社会構造』東京：みすず書房.
- 尾上久雄、1977. 「労働の質の変化と中流意識」『中央公論 経営問題』16(1)：290-294.
- Runciman, W. G., 1961. 'Problems of Research on Relative Deprivation' *ARCHIVES EUROPEENNES DE SOCIOLOGIE*, TOME II Numero 2 : 315-323.
- Runciman, W. G., 1966. *Relative Deprivation and Social Justice : A Study of Attitudes to Social Inequality in Twentieth - Century England*. Berkeley and Los Angeles : University of California Press.
- Stouffer, S. A., E. A. Suchman, L. C. DeVinney, S. A. Star, and R. M. Williams Jr., 1949. *The American Soldier : Adjustment during Army Life*. Princeton : Princeton University Press.

A Theory of Relative Deprivation Revisited (8):

A digression on J. Davies's J-curve theory

ABSTRACT

The present paper locates J. Davies's J-curve theory of revolution as a contribution to the development of a theory of relative deprivation, although he did not use the term as such in his paper titled "Toward a Theory of Revolution". He suggested that revolutions are most likely to occur when a prolonged period of objective economic and social development is followed by a short period of sharp reversal to generate a serious gap between the expected need satisfaction and the actual need satisfaction, which he characterizes as J-curve theory. He analyzed three revolutionary episodes using the J-figure to depict the development and the following downfall which eventually brought about revolutions. His theory seems to satisfy the requirements and definition of relative deprivation proposed by Runciman. While other scholars such as Stouffer, Merton, Davis and Runciman focused on the cross-sectional data and approach, Davies focused on the longitudinal data and approach. Thereby, Davies played a role in expanding the scope of a theory of relative deprivation.

Key Words: Relative deprivation, revolution, J-curve theory, Runciman